Charles W. Chesnutt,

The Conjure Woman ―― 二重構造の意味

田　中　育　造

1

1853年に出版された William Wells Brown (1814－84) の *Clotel; or The President's Daughter* を嚆矢とするアメリカ黒人小説は，1900年を中においた凡そ10年間に最初の開花期を迎えるのであるが，この期の作家の一人である Charles Waddell Chesnutt (1858－1932) は黒人最初の本格的な短篇小説を書いた作家として評価されている。それはチェスナットが大部数を発行する白人読者向けの雑誌に作品を載せた初めての黒人作家であるというばかりではなく（しばらくの間，作者が黒人であるという事実を敢えて読者に知らせることはしなかったが），その作品世界が，同じ南部大農園を背景にしたものであっても，当時の白人作家達が描いた温情溢れる白人主人と柔順で素朴な黒人奴隷とが織りなす「フィクション」とは違って，白人支配下に於ける黒人の厳しい現実の姿を偽りなく描いたというところにある。

チェスナットの最初の著作である第一短篇集 *The Conjure Woman* (1889年) は7篇からなっているが，このうち第一話・第二話・第七話は *The Atlantic Monthly* 誌 (1887年・1888年5月・1899年1月) に，第四話が *Overland Monthly* 誌 (1889年6月) に掲載された。各篇とも背景，登場人物は同一である。North Carolina の地にぶどう園を開こうと計画して北部からやって来た白人をナレーターに，南北戦争前，この地の農園主の奴隷であって，解放後もそのまま住みついている黒人 Julius がノース・カロライナ黒人訛りで語る昔語りが中心となる。この形式はおそらく，当時新聞に連載されて好評を博し，後に1880年と1883年に単行本にまとめられた Joel Chandler Harris (1848－1908) の

Uncle Remus 物語[1]を踏襲したのであろう。しかしハリスの場合は，奴隷であったリーマスが昔の主人の孫息子に話して聞かせるという形はとるものの，実質的には作者が聞き集めた黒人民話集といってよいものであるのに対して，『魔法使いの女』では，ジュリアスの昔語りの外側にもう一つナレーターの叙述する世界が加えられ，創作の要素を強めている。この点はすでに Edward Margolies も指摘しているところである。[2] 又，語りの内容も，リーマスの方が動物寓話で，その殆どが，弱者が機転を利かせて強者を出し抜く話ではあっても，二者の関係は必ずしも黒人対白人に当てはめなければならないわけではないのに対して，ジュリアスの話に登場するのはすべて黒人奴隷が中心となる。そしてその外側にジュリアスとナレーターという黒人対白人の関係が更に加えられている。

小論では『魔法使いの女』に於けるナレーターの叙述とジュリアスの語りという二重構造の持つ意味を，各篇について探ってみたい。なお，この叙述と語りについて作者は夫々 "outside story", "inside story" と呼んでいるようであるが，[3] ここでは Richard E. Baldwin の用語を[4]借りて，ナレーターの叙述を "Frame" ジュリアスの語りを "Tale" とする。テキストは1969年刊 The University of Michigan Press 版に拠った。

2

(1) *Uncle Remus: His Songs and His Sayings*, 1880; new ed., 1895, with ills. by Arthur Burdette Frost. *Nights wtih Uncle Remus: Myths and Legends of the Old Plantation*, 1883.

(2) *Native Sons: A Critical Study of Twentieth-Century Negro American Authors*, Philadelphia: J. B. Lippincott Co., 1968, p. 25.

(3) Helen M. Chesnutt, *Charles Waddell Chesnutt: Pioneer of the Color Line*, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1952, p. 94.

(4) Richard E. Baldwin, "The Art of *The Conjure Woman*", *American Literature*, Vol. XLIII, No. 3, November 1971.

Charles W. Chesnutt.

第一話　"The Goophered Grapevine"

《Frame》妻の療養のためにオハイオ州北部からノース・カロライナ州のこの地に引越してきたナレーターが，ぶどう園を経営すべく候補地を下検分に行くと，かつてその農園の奴隷であったジュリアスという黒人に会う。今は荒れ果てているぶどう畑に手を入れる計画を知るとジュリアスは，それに反対して次の話をする。しかしナレーターは初志を通す。後になってナレーターは，ジュリアスが僅かばかりのぶどうを自分のものとしていた事実を知り，魔法の話を持ちだしたのも，それを取上げられないためであったのかと合点する。そして今は，自分の御者になることができたのだから，ジュリアスにとってはそれを補って余りある筈だと考える。

《Tale》南北戦争前，ここのぶどう園の主人はつまみ食いされるのがいやさに，魔法使いにたのんでぶどう蔓に魔法をかけたので，それを食べた者は死んでしまう。ある時新入りの奴隷が知らずに食べてしまい，魔法使いのところに連れて行かれて一命だけはとりとめた。ところがその男は秋，ぶどうの葉が落ちるとともに頭髪が抜け落ち，体もきかなくなる。春になり，ぶどう蔓に新芽が吹き，葉が繁ると，男も髪が生え，元気になる。これを知った農園主は金儲けを企らみ，男が元気な時に高く売り，弱った時に安く買いもどす。欲にとり憑かれた主人は，北部からの客人に教えられた収穫倍増の方法をぶどう蔓に施すと，一時は今までにない程よく成長するかに見えた蔓が，やがて萎れて枯れてしまう。同様に，一時は近年にないほど元気であった例の奴隷は衰弱して死んでしまう。戦争とともに農園は没落した。しかし魔法は今も消えてはいない。

主人対奴隷という関係は本来，搾取以外の何ものでもないのであるが，Tale に於いては，奴隷が元気な時に1,500ドルで売り，弱った時に500ドルで買いもどすという形で搾取は一層強化され，遂には奴隷を死にまで追いやる結果になる。ここに描かれるのは，利潤の飽くことなき追求のためにぶどう蔓を枯らし，それと一体となった奴隷を死なせるこ

とによって，自然と生命の破壊者となる主人と，犠牲者たる奴隷の姿である。この関係は Frame でも繰返され，ぶどう畑の一隅に住み，ぶどうから何がしかの生活の資と楽しみを得ていたジュリアス，つまり土に密着して生きてきた黒人をナレーターは自然から引き剥がし，自分との間に御者という雇用関係を作ってしまう。“I believe, howevever. that the wages I paid him for his services as coachman, for I gave him employment in that capacity, were more than an equivalent for anything he lost by the sale of the vineyard”（35ページ）と，金銭の次元でしか考えられないナレーターの思いあがりの意識は，Tale の主人の位置と同一線上にある。解放令後に得た諸権利が次々と剥奪され，差別が次第に甚だしくなってゆく再建時代から19世紀末にかけての時代は，実質的に奴隷制時代と何ら変わるところがないという作者の認識と抗議の姿勢を Tale と Frame の組合わせからみることができる。

ただ，注意しなければならないのは，この篇に於ける魔法の使い方である。“He〔master〕sent fer a mighty fine doctor, but de med' cine did n' 'pear ter do no good; de goopher had a good holt”（25ページ）とあるように，黒人女がかけるこの魔法は，近代医学を受付けないほど強力であり，R・E・ボールドウィン はここに “his〔the black's〕equality with, or superiority to, whites”(5) をみるのであるが，しかし結局，主人の貪欲の前に魔法の蔓も枯れ，ナレーターによって開墾されてしまうということで威力を失うわけである。この魔法はそもそもが主人の利益を守るためのものであり，これによって不利益を被り，生命を失うのは奴隷なのである。この点が他の6篇とは違うところであって，作者の意図を曖昧にしてしまっているのは否めない。

第二話 “Po' Sandy”

《Frame》妻が台所を改造したいというのでナレーターは費用節約のために所有地内に建っている廃屋を解体してその材木を使おうと考える。不足分の材木を買いに製材所へ行くと主人が留守で，帰りを待つ間

（5）前掲書，p. 388.

にジュリアスは次の話をして聞かせる。その夜妻は全部新しい材木にしたいと言い出す。加えて，例の廃屋でジュリアスが宗教の集まりをするのを許したと夫に告げる。

《Tale》働き者の奴隷がいた。その働きと器用さの故に，他所に所帯を持っている主人の子供達から常に借りられ，どこが自分の居場所かわからないほどで，そのうちに，知らぬ間に妻が売られてしまい，新しい女があてがわれる。この女は魔法の心得があり，もう盗回しされるのはいやだという夫を木に変え，夜にこっそり人間にもどすという生活を始める。二人が狐に化けて逃亡しようとしたその夜，女が主人の息子の妻の看病に貸し出され，しばらく帰られないでいるうちに木が切り倒されてしまう。その材木で出来た台所は夜な夜な呻き声がするので使う者はなく，解体して校舎を作るが声は消えない。一方，女は夜毎その建物に行っては涙にくれていたが，ある冬の朝，校舎の床の上で冷たくなっていた。

この篇での Tale は，ジュリアスが自分たちの宗教集会の場所を獲得する手段として用いるという形をとるが，作者の意図は以下のところにあるだろう。それは，ジュリアスの話を聞いたナレーターの妻に，“what a system it was…〔中略〕…under which such things were possible!”（60ページ）と言わせているように，“a tragic incident of the darker side of slavery”（41ページ）を通して，奴隷であることの意味を問うことであり，牛馬にも等しい労働を強いられ，仕事での留守中に妻を売りはらわれても“he soon seed dey want no use cryin' ober spilt merlasses”（42－3ページ）と諦めなくてはならないように，黒人に苛酷な生活条件を強いてきた奴隷制に対する告発である。男の化身である松が主人の命令で切り倒されるのは，まさに奴隷と主人との関係を象徴的に表わしている。

ナレーターは妻の言う“such things”の意味すら解し得ない白人として描かれているのに対して，ナレーターの妻はその様な情況の理解への糸口としての役割が与えられてはいるものの，奴隷としての，そして戦争後の白人対黒人の情況は，ナレーターの妻が廃屋を使わせたり，集

まりのために僅かばかりの喜捨をするといったことで表わされる白人の単なるセンチメンタリズムでは到底律しきれない，遙かに次元を越えたものである。"En folks sez dat de ole school 'ouse, er any yuther house w'at got any er dat lumber in it w'at wuz turnt inter, is gwine ter be ha'nted tel de las' piece er plank is rotted en crumble' inter dus'"（60ページ）というジュリアスの言葉には，虐げられてきた黒人の，白人に対する消すことのできない怨念が込められているのである。

第三話 "Mars Jeems's Nightmare"

《Frame》ジュリアスが孫と称する若者をナレーターのところに連れて来て雇ってくれと言う。働かせてみるとこの若者は怠惰で責任感がなく，ナレーターは首にしてしまう。しかしジュリアスの話を聞いたあと，ナレーターの妻はもう一度男を使ってみることにする。

《Tale》奴隷の扱いに冷酷無比な主人がいた。それを恨みに思う奴隷の一人が魔法使いに薬を調合してもらい主人に飲ませる。主人が所用でしばらく留守にしている間に，一人の奴隷が連れて来られる。ところがこの奴隷は鍬の使い方すら知らず，主人に勝るとも劣らないほど人使いの荒い棒頭(ぼうがしら)(6)がどんなに鞭打っても役に立たないので，元の所有者にかえされてしまう。この所有者もこの奴隷を競売で買ったばかりであった。ある日，魔法の薬を主人に飲ませた奴隷が森に行くと，乞食のようななりをした主人に呼びとめられる。悪い夢を見たのだという。そのことがあってからは奴隷に対する主人の態度は一変し，随分とおだやかなものとなった。

ここでの Tale は，ジュリアスが孫の働きの悪さのためにする，雇った側から見ればかなり見当違いの，弁解である。結局は若者の解雇が取

（6）北海道方言で「監獄部屋の幹部。土工夫（たこ）の労働を督励し，逃亡を防ぐため，常にカシのこん棒をもって土工夫の監視に当たり，仕事の能率の落ちたもの，逃亡をはかったものをなぐりつけ，ときには殺した。」北海道新聞社編『ほっかいどう語――その発生と変遷』札幌・北海道新聞社，1970年，223ページ。

消され，ジュリアスの所期の目的は達せられる。しかし，この Tale に含まれる意味は深い。

ジュリアスの語りの前に，馬を手荒に扱っている男を見たナレーターの妻に "I think there is no worse sin and no more disgraceful thing than cruelty"（69ページ）と言わせ，語り終ったジュリアスに "Dis yer tale goes ter show…〔中略〕…dat w'te folks w'at is so ha'd en stric', en doan make no 'lowance fer po' ign'ant niggers w'at ain' had no chanst ter l'arn, is li'ble ter hab bad dreams, ter say de leas', en dat dem w'at is kin' en good ter po' people is sho' ter prosper en git 'long in de worl'. "（100ページ）と結論づけさせているように，作者は一見，奴隷制の持つ非人間的な要素を罪の問題として，又は良心の面から白人読者に訴えているかにみえる。そして確かに，「良心的」な白人はそのような "moral" を読みとるであろう。しかし，この "bad dream" には別の意図が読みとれる。それは，悪夢が魔法の力をかりたとはいえ，黒人奴隷が白人主人に仕掛けたものであるという点にある。白人読者はこの魔法の話を，薄気味悪い思いはするであろうが，荒唐無稽なものとして笑いで済ましてしまうかもしれない。だが黒人には重要な意味を持ってくる。「魔法」はいつでも銃や刀のような具体的な手段にかわり得るものなのである。この Tale がもし黒人民話であるとするならば，それは解放前の奴隷の心に育っていた白人主人に対する反抗の意識の表現であり，ナレーターが憶測するように（101ページ）もしそれがジュリアスの作り話であるとするならば，――民話として話すとしても，話すこと自体がそうであるのだが――解放後の黒人が見せる，白人優位の体制に対する挑戦である。このようにみると，魔法の汁が入ったスープを主人がさもうまそうに飲み，すっかり平らげてしまうくだりは，ジュリアスのことを "he seemed to consider himself an appurtenance"（65ページ）と，白人が作り上げたステレオタイプとしてしか見れないナレーターの描写とともに，重々しい響きをもってくる。

第四話 "The Conjurer's Revenge"

《Frame》新たな土地を開墾するために騾馬が欲しいと言うナレーターに，ジュリアスは騾馬はいけないと言って次の話をし，代りにいい馬を世話するからと，見かけはちゃんとしているが全然使いものにならない馬を売りつけてしまう。馬は二三カ月もたたないうちに死んでしまい，ある日ナレーターは，ここしばらく給金を与えていないにもかかわらず，又，ジュリアスには金目の物もない筈なのに，ショー・ウインドウに飾ってあった服を身に着けているジュリアスを見て，さては一杯食わされたかと思う。

《Tale》魔法使いの子豚を，それとは知らずに捕えて食べてしまった奴隷男が，魔法使いの知るところとなり，騾馬にされてしまう。主人に買われたこの騾馬は，煙草の葉を食ったり，ぶどう酒を飲んで酔っぱらったり，もと男のものだった女に手を出した男を蹴とばしたりして，皆に不思議がられる。やがて魔法使いが重病になり，今はの際に，せめてもこの世での償いにと，男を人間の姿にもどそうとするが，あと片脚だけというところで力尽き息絶える。男の片足は棒足のままになる。

この一篇での Frame と Tale の関係は，Tale がジュリアスの金儲けのために仕掛けられた罠であって，ジュリアスはまんまと成功するわけであるが，この関係に内包される意味は深いものがある。つまり，Tale での魔法使いの豚盗人に対する報復は，Frame の中でジュリアス対ナレーターに置きかえることができるものである。奴隷男は，知らなかったとはいえ，魔法使いの豚を盗ったが故に報復を受けた。ナレーターは，自分が加害者であると意識するしないに関らず，黒人を虐げ，搾取してきた白人側の人間であるわけで，知らないとはいえ，黒人から財産を何らかの形で盗んできたと言っていい。役にも立たない馬を売りつけてナレーターに一杯くわすのは，そうした積年の貸しに対して突きつけたジュリアスの付けに他ならない。

更に加えて，ジュリアスの語りの内容についてナレーターの妻は，"It isn't pathetic, it has no moral that I can discover. and I can't

see why you should tell it. In fact, it seems to me like nonesense."（127ページ）という感想を述べる。これに対してジュリアスは，この話は真実である，"Dey's so many things a body knows is lies, dat dey ain' no use gwine roun' findin' fault wid tales dat mought des ez well be so ez not."（128ページ）と答え，ちゃんと太陽が動いているにもかかわらず，地球が太陽の回りを廻るのだという大嘘を学で教えているではないかという例をもち出す。ここで読者はジュリアスの愚かさ加減を笑うのであろうが，まさに，ここにこそ作者の皮肉がある。白人支配・黒人服従の体制を正しいと信じて疑わない白人の"moral"こそ天動説と同じく"nonerense"であるというものである。ジュリアスを笑う笑いが，そっくりそのまま己れに跳ね反ってくるこの諷刺は鋭い。

この一篇でのジュリアスは，白人がこれまで作り上げてきた，白人に柔順でお人好しのアンクル・トム的黒人像の否定である。馬のむくろを前にして発する"the deceitfulness of appearances"というナレーターの言葉は，まさに，黒人の真の姿を前にした白人の驚きの声でもある。1930年代に Richard Wright が描いてみせた白人に決然と反抗し抗議する黒人像の萌芽をここに見ることができる。

第五話　"Sis' Becky's Pickaninny"

《Frame》ナレーターの妻が何か快々として楽しまない様子の続くある日，ジュリアスがお守りとして兎の後趾を持っているのを見てナレーターが，"throw off these childish superstitions and learn to live by the light of reason and common sense"（135ページ）と説教する。するとジュリアスは次の話をして去るが，話を聞いた日から妻の体の具合はめきめき良くなり，やがてすっかり回復する。ナレーターは妻の服のポケットからジュリアスが持っていた兎の後趾を見つける。

《Tale》競走馬欲しさに，主人が子持の奴隷女と交換することになり，母子は引き裂かれてしまう。哀れに思って乳母が魔法使いに相談に行くと，魔法使いは子供を小鳥に変えて母親のもとへ飛ばせてやる。次に母親を子供のもとへとりもどすために一計を案じ，蜂を使って競走馬

の脚を刺して腫れ上らせ，女には死にそうな様子になる魔法をかける。結局主人と元の馬の持主は取引きがなかったことにして，母子は再び一緒になる。子供は成長して鍛冶屋になり，母親の自由を，次に自分の自由を買いとった。

この物語りに於けるテーマの一つは，一頭の競走馬と同じ価値しか与えられていない奴隷という存在の非道な情況に対する告発にある。It〔the countenance of the narrator's wife〕had expressed in turn sympathy, indignation, pity, and at the end lively satisfaction"（158ページ）という描写に見られるように，ジュリアスの話を聞くナレーターの妻の表情によって作者の白人に対する期待が表わされる。そして"the story bears the stamp of truth, if ever a story did.…〔中略〕…The story is true to nature"（159ページ）と言わせている。たしかに母子離別と再会の物語りは，白人・黒人の別なく人情に最もよく訴えるであろう。しかし，虐げられる者の側からは，別な"true to nature"のものがある。作者のねらいのもう一つは，魔法が，支配する者に対してとる抵抗の手段であって，いかなる手段をとろうとも抵抗が"true to nature"になるのだというところにあるだろう。この篇でも，第三話と同じく，魔法は所有物とはいえ主人にまで及ぶのである。

更に兎の後趾のお守りを通してもう一つの意図を探ることができる。ジュリアスは母子が苦難にあったのはお守りを持たなかったからだと説明するのであるが，お守りとは，魔法とともに，奴隷制のもとで必死に生きる黒人にとって生きのびるための知恵であると言いかえることができる。妻のポケットから出た兎のお守りについてナレーターに何のコメントも言わせずに物語りを閉じているところからもわかるように，"childish superstitions"の前に"reason and common sense"は沈黙する。ここに，奴隷制を，そして解放令以後は Jim Crowism を"reason and common sense"であるとする"superstitions"に気がつかない白人の精神構造に対する批判が見えてくる。

Charles W. Chesnutt.

第六話 "The Gray Wolf's Ha'nt"

《Frame》ナレーターは森の一角を切り開いて畠にしたい考えをジュリアスに話す。ジュリアスは次の話をして，何かひどい目にあっても知らないと言う。しかし，ナレーターが木を切り払っても，そこには狼の棲んだ形跡はなく，蜂が蜜を溜めている木が一本あったところから，ナレーターはジュリアスがこれを自分のものにしておきたかったために例の話をしたのだろうと思う。

《Tale》愛し合っている若い奴隷がいたが，魔法使いの息子が女に横恋慕してしつこくつきまとう。男は怒ってその息子を危めてしまう。父親はこれを知り，策を弄して女を黒猫に変え，男を狼に変えて，猫を噛み殺させる。今際のきわの女から事の次第を聞いた男は魔法使いを噛み殺して森へ逃げこむ。以来その森にはこの狼の怨霊がさまよっている。

この篇について R・E・ボールドウィンは，"The tale is perfect in itself, but it is badly marred by being forced into a trite and irrelevant frame. The tale deals with conflict within the slave community and lacks the interracial conflict on which vital parallels between tale and frame depended in the…〔中略〕…earlier stories."(7) と評している。たしかに，ジュリアスの話によってナレーターの計画は1年延ばされたものの，結局森は切り開かれてしまい，ジュリアスのひそかな所有物は簡単に取上げられてしまうという点で，ジュリアスのはかない抵抗と，白人の前の無力な黒人の立場が示されることになるのであろうが，Tale の内容が Frame と有機的に結合せず，効果は弱いものとなっている。

ただ，この物語りの始めの方でナレーターと妻との間に一寸したやりとりがあり，ナレーターが妻に読んでやる本の一節が transformations に関するもので，transformations はあまりに雑多な様相を呈するので，その全体を把握するのは不可能に近い，という箇所であるが，妻から "I wish you would stop reading that nonesense"（164ページ）と

（7）前掲書，p. 395.

言われて，妻はどんなに簡明であっても哲学を解しないと嘆くところは，ジュリアスが素朴な変身物語を語るその気持の裏を全く解さないナレーターに対する作者の皮肉ととれないこともない。しかし変身はこの物語りではやはり中心的役割にはなり得ず，これまでのような作者の批判は見当たらない。

第七話 "Hot-Foot Hannibal"

《Frame》ナレーターの義妹が婚約者と仲違いしてしまったある日，三人はドライブに出かけることにするが，行く道のことで妻とジュリアスの意見が分かれる。妻の主張してやまない方を行くうちに，柳の枝が道の上に覆いかぶさっている地点で，馬はそれ以上進もうとしない。ジュリアスはその木にまつわる話をする。話の後，ジュリアスの選ぶ道を目指すと，馬もすなおに進みだす。すると妹の相手の男が，これを限りとこの地を離れようとしているのに会い，二人は和解する。

《Tale》働き者の奴隷女が主人から結婚相手をあてがわれる。しかし女には思う男がいるので，魔法使いにたのんで好きな男に添えるように計らってもらう。首尾よくいくかに思われていた矢先，主人に魔法がばれ，思う男は売られて行く途中逃亡して溺死し，女は柳の下で男を待って死んでゆく。

Tale によって描かれるのは，主人から，まるで動物を番わせるように相手をあてがわれる奴隷女を通して，奴隷制度の持つ非人間的な局面である。柳の下にさまよう霊は，こうした軛の下で，思いを果たせなかった女の怨念であると同時に，その情況を強いた白人社会に対する黒人の怨念でもある。この Tale が Frame の中に組み込まれることによって，つまり女の霊が白人三人の乗った馬車を止めることによって，解放後も体制は変っていないのだという作者の告発となると同時に，男を思う女の気持に黒人も白人と全く異なるところはないのであって，黒人も白人と同じ感情を持った人間なのだという主張にもなる。結ばれる白人カップルとの対比によって黒人カップルの悲しみは一層きわだつことに

なる。加えて，このドライブと女の霊の話が事情を知ったジュリアスの粋な計らいであろうとしか考えられないナレーターを描くことによって，この悲劇の持つ意味を理解できない白人の思いあがり（妻の目の涙に作者の期待は表わされているものの）に対する作者の皮肉が見えてくる。実際，ジュリアスの粋な計らいであっただろう。しかしそうであればなおさらのこと，数々の苦しみを経たあげくのこの行為は神の業に近いものとなる。

3

以上各篇について見てきたところをまとめてみると，Tale によって描かれる世界は，奴隷であることの偽らざる姿である。そこには奴隷の悲しみがあり，苦しみがあり，忍耐があり，怒りがあり，反抗があり，そこで生きぬく智恵があり，人間であることの主張があった。それらはこうした情況から生みだされた黒人民話をふまえ，すでに数多く出版されてきた奴隷体験記という，アメリカ文学の中でも特異な位置を占める黒人の苦い文化遺産を継承する。すべてが，白人の作りあげたステレオタイプ――「満足しきっている黒ん坊」像の否定である。

Frame によって描かれる世界は，ナレーターは，自ら作りあげた黒人観にとらわれて現実の黒人の姿を見ることができない白人の典型として専ら作者の諷刺の対象となる。ジュリアスの話に少なからず理解と同情を示すナレーターの妻には，小説を書きだす前の1880年5月29日の日記にチェスナットが，“The object of my writings wouled be not so much the elevation of the colored people as the elevation of the whites.”[8] と記しているように，白人の覚醒に対する期待が籠められる。各篇の中心になっているジュリアスの昔語りは，単に白人の無聊を慰めるためにするものでもなければ，過ぎにし昔を懐しむためのものでもなく，専ら自分又は身内の者の利益を守る手段である。奴隷が自らを守るために用いた魔法が，ジュリアスの語りとなって，今度はナレーターに

（8）Helen M. Chesnutt, 前掲書, p. 21.

かけられることになる。身を屈して白人の慈悲を乞うのではなく，智恵を働かせて，昂然と自らを恃するジュリアスの態度は，もはやアンクル・トムと同日のものではない。

このように，『魔法使いの女』は，各篇が連なって全体としてのストーリーの展開は見られないが，[9] Frame と Tale の二重構造によって，黒人の過去の苦しみが現在に受けつがれ，過去の苛酷な情況の告発が現状に対する批判へと連なって，一貫して，抵抗する真の黒人の姿が描かれることになる。この構造が有機的に結合するとき，作者の主張が単なるプロパガンダに終らず，芸術作品にまで高まっているということができる。

(9) H.M. Chesnutt 同書，p. 101. 編集者に宛てたチェスナットの手紙の一節に "the order is not essential" という箇所が見える。

The Significance and Structure of *The Conjure Woman* by Charles Waddell Chesnutt.

Ikuzo TANAKA

Résumé

The Conjure Woman, Charles Waddell Chesnutt's first collection of short stories, published in 1899, has seven stories, and each consists of the narration of a Northern white and a tale of slavery days told by an ex-slave of a Plantation in North Carolina. The essay aims to show the significance of the narration-tale structure of the book. Unlike the fictions of benevolent masters and humlle, appreciative slaves which were popular among the white readers at the last quarter of the nineteenth century, Chesnutt tells us the real life of black people——the tragedies of slavery and the racial struggles of post-bellum days.